



右) 永井さんの畑には、クリエイターから学生までさまざまな仲間があつまってくる。左) りんごを運ぶ木箱に使われていた印字用の型。これも貴重なりんご文化のひとつ。下) 実すぐり(摘果)をしながら畑をまわる。永井さんの手で今年も元気に実をつけた。

### 永井さんの創業まで

2019年4月  
地域おこし協力隊就任

2020年3月 畑を借りる

2020年10月 収穫りんご初販売

2021年8月  
株式会社Ridun創業

2022年3月  
地域おこし協力隊卒業



### 支援機関から一言

地域おこし協力隊として「りんごプロジェクト」で活動されており、ただりんごを生産、販売することだけでなく広い視野で、りんごを通して地域での課題をどのように解決していくのか？具体的には、生産農家の減少問題、新規就農者への研修制度、加工化による付加価値の増強などの対応策を実現するなど、枠組みの改革にも積極的に取り組んでいます。今後の永井さんの活躍に期待しています。

### りんご生産を文化ごと楽しむ

移住してから仕事と遊びの境目が曖昧になった。遊

品開発やパッケージデザイン、小売店への売り込みでは前職のプレゼン力が活かされた。最初に手に入れたのが「干雪」というマイナー品種だったため、なんとか魅力を伝えようとSNSを活用。その後、品種や味の違いを知って欲しいと15種類を飲み比べられるジュースを開発した。人気品種のみを扱う大規模農家とは一線を画すアイデアで、女性や若い消費者に好評を得ている。

「畑に来る友人はデザイナーや文章を書く人などさまざま。農業にゆかりがなくとも関わることはできる。市場ニーズ以外にも、別な視点からものの魅力を伝えられる人が必要」  
木箱に印を付ける金属型に魅力を感じ、りんごジュースのデザインに応用した。広告業界出身の永井さん自身も異なる視点を持つりんご農家であり、りんごの文化に光を当てる会社でありたいと願っている。

### インフォメーション 株式会社 Ridun



<https://jp-ridun.com/about>



食べるだけじゃもの足りない  
りんご文化を伝える農家に。



**Jターン** 永井 温子さん  
福島県→千葉県→弘前市  
株式会社Ridun(農業)  
2021年8月創業

地域おこし協力隊として弘前市に居住した永井さん。りんご農家を増やすためのミッションだったはずが、気がつけば自らがりんご農家として創業することに……。

### 先延ばしにしない と決めた

岩木山の裾野を覆うように広がるりんご畑では、実すぐり作業が行われている。若手りんご農家として活躍する永井さんは福島県出身で、弘前大学を卒業した後は東京の広告会社で営業職に就いていた。いつかは東北に戻ろうと考えていたが、お世話になった方の訃報を耳にし、

「やりたいことを先延ばしにしてはいけない」と一念発起。2019年4月、地域おこし協力隊として弘前市に戻ってきた永井さんには、「後継者不足解消のため、りんご農家になりたい人を増やす」というミッションが与えられる。

自らも一からりんご栽培を学びながら活動を続けるうち、前例が少ないなら自分で畑をやってみようと思いつき、まずは40アールのり

んご畑を手に入れた。  
**りんご農家として創業**

現在は2.5ヘクタールを管理している永井さんだが、外から来た未経験者が簡単に畑を持てるのか。  
「この畑は92歳の方から引き継いだもの。何度も通ってちゃんと面倒見られると態度で示して理解を得た」  
高齢農家にとって我が子同然のりんご畑は、まささらな土地を購入するのは異なる難しさがある。創業にあたっては、ひろさきビジネス支援センターのサポートを受けた。その際、農地取得に融資してくれるのは日本政策金融公庫のみであること、事業計画書ではどこをアピールするべきかなどのアドバイスももらい、無事畑を手に入れた。

2021年度末で地域おこし協力隊を卒業し、現在はりんご農家としてりんごを生産し、管理しやすいジュースにして販売している。商